

仕事力

「自分のリアリティーをつかむ」

團 紀彦が語る仕事 1234

自己ブランド化は虚しい

閉塞感が強くなると 仕事の本質を見失う

建築学科を出て一生懸命仕事に取り組んでいたのに、やめてしまう若い人が増えていきます。私たちが学生の頃までは「あんな建築家になりたい」と希望を放っている先人の存在があり、それがモチベーションの源でもあったのですが、現在は、個人の建築家が自分らしい発信で既成概念を打ち破っていきたく。

大小の企業も含めて社会全体がマニュアル化してきたために、個人の魂とか裁量を受け入れられなくなったのだと思います。それが、仕事の現場であきらめを生んでいるように感じられてなりません。例えて言えば、大きなハンバーガーチェーン店では、各店舗がそれぞれに工夫してマニュアルを改善することができにくい。でも、2人で始めたハンバーガー屋さんなら、ここをもっと改善しようという知恵はすぐ受け入れられます。やりたいことができるという、いきいきとした個人のリアリティーが仕事には最も大切なはず。

さらに私が懸念しているのは、建築家を始め、多くの作り手が欧米の雑誌とかメディアに取り上げられるのを終着点にしていることです。うまく自分をブランディングして、流れに乗っていかうとしている。そんな注目のされ方にあると、いつも人からどんなふうに評価されるかと上目遣いになっていく。そんな仕事は決して尊敬を集めないのですが。

モチベーション探しを 急がない、あきらめない

私の事務所に来てくれるアルバイトの中には、アフリカを一人で2年間旅してくるような骨のある人がいますが、私はそういう気持ちの仕事は大切だと思う。普通だったら建築事務所では何年か修業するところを、なぜその間ずっと大陸を歩いているのかと聞けば、彼なりのモチベーションをつかみたいからなのです。

都市文明の中には、若者に受けるようにブランドが肥大していく建築もあります。しかし広く世界を考えると、実は井戸のほうが重要だったり

するものです。自分が仕事に取り組むのは何をやりたいからなのか、納得できるモチベーションをつかんでおけば、おそらく最も強い原動力として一生の仕事を支えるでしょうね。そこそが、その人だけのリアリティーなのです。

私などは、建築家になるかどうかと決めるにも人より長い時間がかかりました(笑)。父の仕事であった作曲や音楽の道に進むつもりもなく、数学や物理に心引かれたり、建築学科に入ってはみたものの成績が堪えないので新聞記者になろうかと考えたり。そして大学4年生の最後の設計課題を提出する時期になってしまいました。提出の3日くらい前になってしまったくまとまらなかったので、思い切って先生が言ったことをすべて無視して、自分なりの案を持って臨みました。そこで初めて「これは非常にいいね」とほめてもらって、脚が動かなくなるほど感動し、建築をやっていたのかなと思っただけです(笑)。あなたのリアリティーは、あなたにしか分かりません。周囲に同調することなく、たくましくつかみに行ってください。

(談)

専

紀彦



だん・のりひこ ●建築家/都市計画家。1956年神奈川県生まれ。79年東京大学工学部建築学科卒業後、大学院で博士に修業。84年 米国イェール大学建築学部大学院修了。知万博日本誘致案の作成に参画。誘致後の環境重視型案の棄却と平場造成の復活に対し、旧来の日本の開発手を厳しく批判、高層の森の保全に道を開いた。長野県田中村知事のもとで、軽井沢町の環境保全のためのマスター・キテクトに就任(2003~06年)。ユニヴァーサルフォームなどを進め、建築とランドスケープの一体化や、新町屋論などしい街路再生型の都市論を提唱する。現在台北国際空港1ターミナルや日月潭風景管理所の計画、日本橋室町地区マスター・キテクトとして街区の再生計画などを手がけている。公式ホームページ <http://www.dan-n.co.jp>

仕事力

「自分のリアリティーをつかむ」

團紀彦が語る仕事

1234

だん・のりひこ ●建築家／都市計画家。1956年神奈川県生まれ。79年東京大学工学部建築学科卒業後、大学院で横文彦に師事。84年 米国イェール大学建築学部大学院修了。愛知万博日本誘致案の作成に参画。誘致後の環境重視型原案の棄却と平場造成の復活に対し、旧来の日本の開発手法を厳しく批判、海上の森の保全に道を開いた。長野県田中康夫前知事のもとで、軽井沢町の環境保全のためのマスターアーキテクトに就任(2003～06年)。ユニヴァーサルフォーム論などを通じ、建築とランドスケープの一体化や、新町屋論など新しい街路再生型の都市論を提唱する。現在台北国際空港第1ターミナルや日月潭風景管理所の計画、日本橋室町地区のマスターアーキテクトとして街区の再生計画などを手がけている。公式ホームページ <http://www.dan-n.co.jp>

「今に見ている」は舵になる

留学して明確になった。
西洋の街と日本は違う

必死であるのを尻目に、私は「これからは日本だ」と考えていたのです。

異なったものが接する 境界領域の「調停」

私の修士論文は「都市認識論」というものでした。多元的な都市を人ほどのようなスコープで見るのだろうか。私たちは、我知らず自分のメガネを使ってまわりの世界を見ているのではないかと。例えば人間の体よりもはるかに大きな都市を子どもに描かせると、いかにも様々なんですね。子どもによつては向かい側のビルディングを描いたり、あるいは山手線だけを描く。

人間が生きている場所は、それぞれに自分たちの文化やライフスタイルや、秩序を持っていますよね。それは小さな村でも、あるいは異なった人種が隣り合わせに暮らす都市でも変わらない。例えばインドの人が住んでいる伝統的な居留地の隣が近代的なオフィス街ということもあります。まるでパッチワークのようですね。

しかし、その後に来国の大学に留学して感じたのは、建築や都市というものに對しての、言葉にしない彼らの暗黙のルールとか暗黙の世界観があることが分かります。中世の城郭都市もそうですが、城があつて教会があつて、その他の建物や住まいも一つの秩序で完結している。人間の体に心臓が一つ、肺が二つと自己完結しているのと同じですね。

日本からやってきた私が、多元論的、多神教的な町の話をしても当時の彼らはまったく理解しなかつたし、むしろそういうものは間違っていると、先生も生徒も認めようとはしませんでした。一つの建物をこちらから見たら赤に見えるが、反対からは違う色に見えるというようなことも倫理に反すると(笑)。

それはやはりとても支配的な物の見方だと思ひました。頭ごなしに、多元的などということは認めないと言っている彼らの非難を聞きながら、私は「今に見ている」とつぶやいていたのです。多元的であることはまぎれもなく世界の事実ですからね。他の学生が欧米の現代建築を自国に持ち込もうと

それぞれ地域は独立した古典的な秩序で成り立っている。しかしその隣り合わせで重なり合う境界には、「分離」や「同化」よりも「調停」という考え方が必要だと私は思うのです。異質なものを疎外化する近隣紛争ではなく、自分たちの文化を押し付ける西洋的な同化でもない。異質を取り込み、時には混ぜ合わせ、豊かにするプラスのエネルギーを生み出していくこと。異質な要素が混在している状況を否定して白紙に戻すのではなく、それぞれの個性を尊重しながら、より豊かな境界線をデザインすることです。

これは自然環境のモデルにも当てはまるのではないかと思っています。そしてもちろん、自然と人間がどう調停して住まうかということでもあります。私がアメリカから早く帰って仕事をしたいと考へたのは、強者が弱者を征服し同化する住まい方ではなく、調停しながら共生する暮らしの知恵が日本には脈々とあることに思い至ったからです。違和感の大きさ、悔しさが仕事の方向を教えてくれたのだと思います。(談)



仕事力

「自分のリアリティーをつかむ」

園 紀彦が語る仕事 1 2 3 4

睨み合いではなく協働する

建築と土木は一つのシステムのはずである

ます。

建築の仕事には必ずクライアントがあります。それは個人の場合もあれば官公庁や自治体、企業であったり、もするわけですが、そのクライアントの意向や予算がまず大きな幹として存在している。しかし、我々はクライアントのためだけに仕事をしている訳ではなく、やはりその建物の前を通る市民を含めて、もっと広い範囲の幸せを考えなくてはなりません。それには思想と言いますか、考え方をしっかりと持っていないと、言われるがままに単なる図面を書くだけになってしまいます。

例えば、京都府の日吉ダムには、建築と土木の考え方の違いの大きさにあせんとしながらも協働した経験があります。ダムの記念館を造るという依頼でした。しかしダムは土木構造物だし、記念館は建築物なので、どの場所を見学してもダムサイトのすぐ脇に妙な記念館が建っているだけで景観が合っていないんですね。そこで私はダムの中に空洞を造って、それを記念館にしたと提案しました。

泥臭い闘いを経て 手にした協働の実感

建築家の重要な仕事は、クライアントの構想や建築依頼について徹底的に考えながら、大きな視点で何かを提案する責任を持つことですね。だから、言われたとおりにやってくれと押し付けてくる官公庁の土木などと、私はケンカするわけです(笑)。しかし双方がシステムとして機能しなければいいものは造れない。意見が食い違うところから、本当に仕事が始まると思ってい

「園さん、そんなことをしたら設計料がもらえなくなりそうですよ」って、ダムの土木担当者が驚いて忠告してくれましたが(笑)、それでもかまわないから空洞にしてみよう。そうしたら土木の人って面白い。構造的には可能だしコンクリート代が浮くので、総工費がマイナスになると喜ぶわけです。

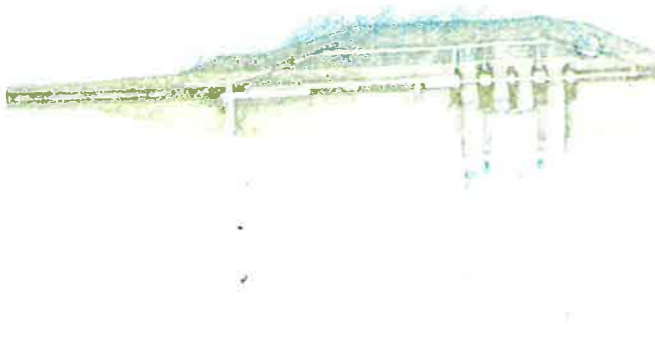
装は何社かの入札にかけるという。発案し設計した私の著作権とか、建築に対する理解がまったくなく、がっかりして全身の力が抜けました。それからダムと広場の間を「調停」する円形の橋を提案して、それも何とか完成したのですが、発売された記念切手にはシンボルとなる橋が入っていない。「これを設計した園さんは建築家であり、土木のこけんにかかわるから入れない」と言うのですね(笑)。

ダムを推進した土木分野の官僚たちと、個人のプロフェッショナルとしての建築分野の対立というか、没交渉というか。この構図は実に長い間の確執になっています。そこで、私は、ダムの設計にあたっては、土木や建築物を別々のものと考えずに、大きな敷地模型を作って、協働してデザインを進めました。そしてやがて、土木と建築が一緒になった良い実例としてグループで建築学会賞をいただいた。

制度上は、土木と建築はいまだに別々であり仲も良くありませんが、でこぼこで狭い日本の国土で、土木と建築が協働しなければ、いい環境を作ることができない。それは譲れないと思うのです。(談)

園

紀彦



だん・のりひこ ●建築家/都市計画家。1956年神奈川県生まれ。79年東京大学工学部建築学科卒業後、大学院で横文彦に師事。84年 米国イェール大学建築学部大学院修了。愛知万博日本誘致案の作成に参画。誘致後の環境重視型原案の棄却と平穩造成の復活に対し、旧来の日本の開発手法を厳しく批判、海正の森の保全に道を開いた。長野県田中康夫前知事のもとで、軽井沢町の環境保全のためのマスターアーキテクトに就任(2003~06年)。ユニヴァーサルフォーム論などを通じ、建築とランドスケープの一体化や、新町屋論など新しい街路再生型の都市論を提唱する。現在台北国際空港第1ターミナルや日月潭風景管理所の計画、日本橋室町地区のマスターアーキテクトとして街区の再生計画などを手がけている。公式ホームページ <http://www.dan-n.co.jp>

仕事力

「自分のリアリティーをつかむ」

團紀彦が語る仕事 1 2 3 4

信じられる方向を探そう

あしき日本の行政慣習が世界の信頼を裏切る

建築家としての理念を貫くために、そして国際社会への信頼を裏切らないために、私が長い闘いをしエネルギーを費やした愛知万博にかかわる願末をお伝えしようと思いません。なぜなら、そこには良くも悪くも仕事に対する私の姿勢が表れているからです。

2005年に開催された愛知万博が、もう一つの立候補地カナダのカルガリーと誘致を競ったのは1997年のことです。日本では私を含めて3人の建築家が選ばれ、またテーマは「自然の叡智」と決定されました。当初の建設省(現・国土交通省)の原案は、万博を足がかりにして山全体を開発・宅地化するというものでしたが、「山の地肌を全部出した上で環境問題を論じるなど、世界から見たらいかにこっけいなことか」と私たちは反論したのです。もちろんその案で誘致を勝ち取るなど到底無理な話でした。

そこで新たに、会場内を通る既存の2幹線道路の内側に住宅を集め、残りのランドス

ケープはそのまま守る案を作りました。通商産業省(現・経済産業省)がこちらの案を推してくれて博覧会国際事務局(BIE)にプレゼンテーションし、「豊かな自然を活かす万博」と高い評価を得て日本が開催を獲得します。

しかし日本誘致が決定した瞬間から建設省主導へと切り替わり、全体を造成する案へ逆戻りしていった。プレゼンテーション案は誘致を勝ち取るためであって、誘致さえしなれば当初の平場造成案でやると言うのです。それでは世界に対してうそをついたことになります。「環境に新しい示唆を与える」と評価された日本への信を裏切ることになります。黙って引き下がらなければいけませんでした。

一人ひとりの胸に仕事への理念がいる

建築家は環境を考えるプロントにいると思っています。すべての自分の仕事には環境を考慮する責任がある。が、3人の建築家のうち1人がその理念を捨て、当初の全体造成案にくら替えして、まず建

築家仲間が対立する構造になりました。大きな流れが国主導で決定してしまうと勢いが付いてくる。異議を唱える声などが消されていくのですね。

しかし実際に動き出すと、世界自然保護基金(WWF)などが気付けて連絡をしたことからBIEが不信感を抱き、調査団を組んでやって来ました。調査団は誘致案と違うことに憤り、日本側は微調整だと言いつつ、その後非公開の議論が2年間も続いて、私にとっても無益なつらい日々が過ぎ、本来の建築の仕事も手につかないほどへきえきしました。

やがて市民の人たちも、「おかしい」と言い始め、結論から言えば候補地の一部である「海上の森」の自然破壊だけは食い止めることができたのです。わずかな成果かもしれませんが、でも私たちが提案した魚雷の一発が命中したという感じがします。

巨大な相手と長い年月を闘う間、何度も「相手はクライアントだ」「反対ならやめればいいじゃないか」と言われました。しかし、それでも仕事とは、自分の理念を掲げてするべきだと思っています。(談)



専

紀彦